

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（28年度採用課題）書面評価結果

領域・分科（細目）	人文学・地域研究（地域研究）
研究交流課題名	日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成
日本側拠点機関名	神戸大学
コーディネーター （所属部局・職名・氏名）	国際文化学研究科・教授・坂井 一成

相手国側	国名	拠点機関名	コーディネーター (所属部局・職名・氏名)
	ドイツ	ヒルデスハイム大学	Department of Cultural Policy・Professor・SCHNEIDER Wolfgang
	ベルギー	ルーヴェン大学	Leuven Centre for Global Governance Studies・Senior Researcher・RAUBE Kolja
	イタリア	ナポリ東洋大学	Department for Asian・African and Mediterranean Studies・Associate Professor・LANNA Noemi
	フランス	パリ・ナンテール大学	Faculty of Social Sciences・Associate Professor・FERRAGU Gilles
	ベトナム	ベトナム国家大学 ホーチミン市校	University of Social Sciences and Humanities・Vice Dean of the Faculty of Japanese Studies・NGUYEN Thu Houg
	タイ	マヒドン大学	Mahidol Migration Center・Institute for Population and Social Research・Associate Professor・PUNPUING Sureeporn
	台湾	国立政治大学	Humanities Research Center・Professor・CHOU Whei-min
	韓国	仁荷大学校	Center for Glocal Multicultural Education・Professor・CHONG Sang-u

総合的評価（書面評価）

評 価

- A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
- B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
- C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
- D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。

1. これまでの交流を通じて得られた成果

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の育成」「国際研究交流拠点の構築」の観点から成果があがっているか。 ・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。 ・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。
--------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果があがっている。 <input type="checkbox"/> 概ね成果があがっている。 <input checked="" type="checkbox"/> ある程度成果があがっている。 <input type="checkbox"/> 成果があがっているとは言えない。
コ メ ン ト
<p>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の育成」「国際研究交流拠点の構築」の観点から成果があがっているか。</p> <p>学術的側面については、個別分野における個別研究者の成果はあがっているようであるが、今後は個別分野での情報交換や交流だけでなく、各分野間における知見を束ねる概念枠組を提示する必要がある。</p> <p>若手研究者の育成については、国際会議における発表をみる限り、若手研究者も含めて本事業に関する研究テーマが多く認められるものの、日本側の若手研究者の育成という目標の達成がやや不十分である。今後、若手の学術雑誌などへの投稿や、査読のある国際学会での研究発表の推進を期待したい。</p> <p>国際研究教育拠点の構築については、論文・発表も含めて、相手国との共同研究の成果が皆無なのは本事業の趣旨から改善すべきである。ただし、イタリア側の若手を神戸大学の特命准教授として採用したことは評価できる。このような仕組みを今後より発展させていくべきであろう。</p> <p>・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。</p> <p>まだ個別的な成果にとどまっているようであり、論文リストに掲載されている論文題目をみる限り、研究交流事業の学術的な成果が十分に公刊されているとは評価できない。研究目標に合致した論文もあるが、研究目標から外れたテーマの論文もあり、数合わせのために含まれているという印象を受ける。論文・発表も含めて、相手国との共同研究の成果が皆無なのは、本事業の趣旨から改善すべき問題だと考えられる。</p> <p>・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。</p> <p>研究交流活動から生まれた波及効果は多々あると想像されるが、まずは主目的に照らした成果が求められる。</p>

2. 事業の実施状況

観点	<ul style="list-style-type: none">・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。
----	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評価
<ul style="list-style-type: none"><input type="checkbox"/> 想定以上に効果的に実施されている。<input checked="" type="checkbox"/> 概ね効果的に実施されている。<input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施されている。<input type="checkbox"/> 効果的に実施されているとは言えない。
コメント
<p>・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。</p> <p>共同研究、セミナー、研究者交流は概ね適切に計画され、実施されていると思われるが、全体的に、韓国や台湾、タイ、ベトナムとの交流の実が、ベルギーやイタリアとの交流と比べると見劣りがする。共同研究は、グループごとの責任体制の明確化が必要である。セミナーについては、2016年度の3回と比べて、2017年度にセミナーの開催が2回と減った。研究者交流は、途中からは順調に交流が進んでいるものと思われる。</p> <p>・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。</p> <p>国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は、概ね適切に執行されていると考えられる。</p> <p>・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。</p> <p>研究交流活動の実施にあたり、経費の執行は適切だと思われる。</p> <p>・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。</p> <p>交流を行うのに必要なマッチングファンドが概ね確保されていると思われるが、共同研究グループごとの責任体制の明確化と、外部資金獲得への意欲をいっそうあげることを期待したい。</p>

3. 今後の研究交流活動計画

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。 ・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。 ・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究交流拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。
-----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> 概ね成果が期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> ある程度成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> 成果が期待できない。
コ メ ン ト
<p>・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。</p> <p>活動計画をみる限り、移民・難民の受入れにある程度開放的な EU 諸国と、日本も含めて閉鎖的だったアジア諸国という根本的な差異を、この研究交流活動を通じて、どのように架橋していくかという問題意識が不十分なように考えられる。今後の交流計画として新たに EU の他国や研究協力上有益な新たな国を加える計画を予定しているようだが、拡散ばかりでなく、当初の研究グループのなかでの深化と国際的共同体制が求められる。各論を示すだけが目標ならば達成は容易だが、本事業の目標としては、各論だけでなく各論から総合された総論をクリアに示す必要がある。</p> <p>・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。</p> <p>全体的に見て、R-1、R-2、R-5 の 3 つの共同研究は EU 諸国の研究者が中心になっていて、そこにアジア諸国の研究者を参加させて、移民と移住に関する研究分野で、ヨーロッパとアジアとの研究交流をより活発化させようという意図が認められない。この点は、本事業の目的を考えれば改善すべき点である。</p> <p>・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究交流拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。</p> <p>期間終了後も、成果を生かして、さらなる発展を目指す意図は認められ、その点では、終了後の活動について考慮されているようであるが、今後移民の文化的側面やガバナンス以外に、文理融合を見据えた具体的な活動やフィールドワークを実施するための外部資金の調達に一層努力されたい。</p>